

アジア太平洋の人をつなぎ学びを育てる

# ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

# news

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行

特集

SDGs へ向けて

GAP 中間年を迎えて…… 2

「ESD 推進の手引」研修…… 6

日タイ高校生

科学技術交流プログラム…… 7

中国・韓国教職員

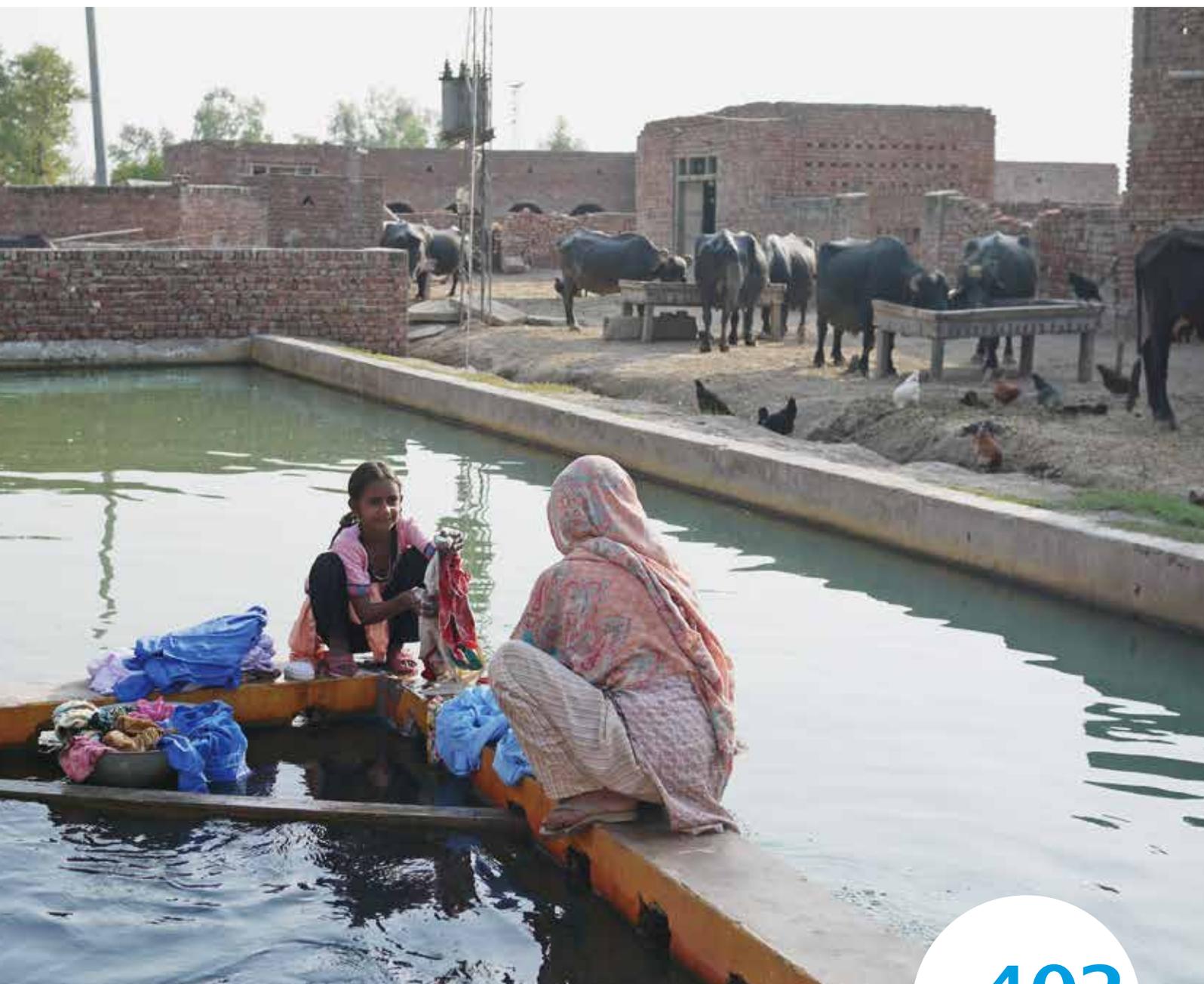
招へいプログラム…… 8

高校模倣国連国際大会…… 9

奈良 フィリピンワークショップ…… 9

コラム「東奔西走」…… 10

活動メモ…… 11



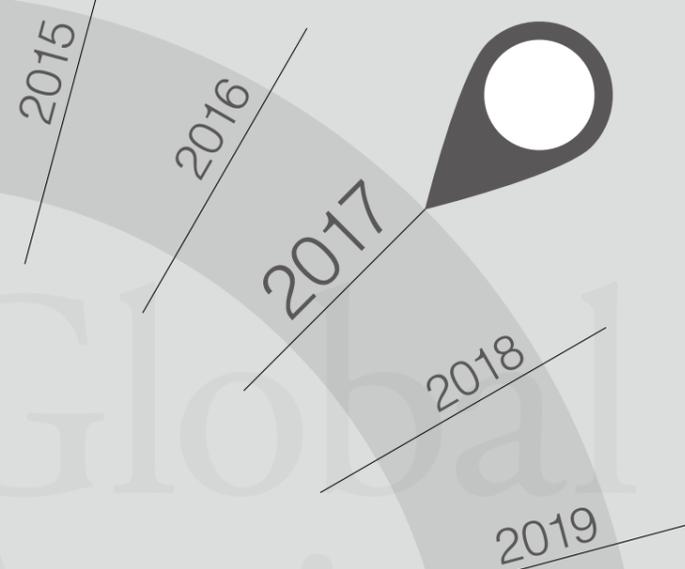
No. 402

2017年6月号



ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO



**特集** 2015年に始まったグローバル・アクション・プログラム (GAP) も中間年となりました。ACCU はユネスコのキーパートナーとして、「機 関包括型アプローチ\*」の分 野で貢献が求められています。



# SDGsへ向けて GAP中間年を迎えて

## ESDのさらなる推進のために

教育協力部長 進藤 由美

持続可能な開発のための教育 (ESD) の重要性に早くから注目していた日本が、南アフリカ・ヨハネスブルグにおいて「国連ESDの10年」を提唱してから今年で15年となります。この間、グローバル化や技術革新の進展を受け、社会は大きな変化を遂げ、地球規模の課題が増大するとともに、課題そのものも複雑化しています。こうした

中、地球環境の保全への危機感に端を発したESDも、社会の変化に対応し、より多様で複雑な課題の解決を念頭に、環境問題だけでなく、より広範に持続可能な社会の構築という目的の達成に向けて発展してきました。ユネスコは「国連ESDの10年」の主導機関としてイニシアチブをとり、そして、各国は持続可能な社会の構築へ向けての

実践を積み重ねてきました。日本では、ユネスコスクールをESDの推進拠点と位置付け、学校教育を通じてESDの普及・充実に努めています。この結果、「国連ESDの10年」開始当初に20校足らずだったユネスコスクールの数が、現在では1000校を超えるに至りました。また、ESDの普及・充実は学校内に留まるのではなく、地域コミュニティや産業界へも広がってきていることも注目すべきことです。

「国連ESDの10年」の最終年2014年11月に「ESDに関するユネスコ世界会議」(名古屋)において、GAPの開始が正式に発表

されました。GAPは2015年から2019年までの5年間を実施期間とする行動計画であり、5つの行動優先分野が策定され、多様なステークホルダーが参画する仕組みが作られています。

今般のレビューフォーラムは、GAPの中間レビューだけでなく、地球市民教育(GCED)\*も合わせたの会議で、それぞれのステークホルダーが「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を達成するための教育の役割についてのアプローチを見いだすことが求められていま

す。

GAPは2019年を最終年としており、残りの期間にそれぞれの優先分野においてESDに取り組んでいくことが重要になってきます。2019年にはGAPの総括的なレビューと評価、そして将来を見据えた指針が示されるのではないかと思います。ESDを推進してきた日本の役割と可能性の大きさを改めて感じた機会となりました。



### ユネスコ・オタワ会議

2017年3月6日から10日にかけて、ユネスコとカナダユネスコ国内委員会の共同主催による国際会議「The UNESCO Week for Peace and Sustainable Development: The Role of Education」が開催されました。この会議は、「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム (GAP) レビューフォーラム」として位置づけられ、2014年以降のGAPの進捗を振り返り、今後のGAPに向けての更なる行動の特定と企画、そしてESDの新たな論点とイノベーションについて議論する場となりました。



ACCUはこの分野のキーパートナーです! 教育者の育成やユースの支援にも積極的に取り組んでいます。

## GAP中間レビュー会議に参加して ユースの一員として思うこと

教育協力部 篠田 真穂

世界中の教育の質にこだわる実践家や理論家が堂に会し、議論を重ねる場に出席できたことは、私にとってかけがえのない機会となりました。会議は全体会と分科会で開催され、全体会では主にESDとGAPの振り返りと展望に関する議論、分科会ではワークショップや発表形式で各GAPキーパート

ナーから報告がされました。その中で特に強調されていた言葉は「持続可能な開発目標 (SDGs)」と「ユース」です。

SDGsとESDの関係性については、これまでSDGsの目標4「質の高い教育」の中で語られることが多かったですが、本会議ではESDが17の目標全てに関

わるものであるとして議論が進められていきました。世界中でノンフォーマル教育、フォーマル教育を問わず、すでにSDGsとつなげて学びを深めている実践事例は少なくなく、日本国内のユネスコスクールにもSDGsをふまえて年間指導計画を組み立てている学校が多くあります。自分たちの活動がSDGsとどのようにつながっているのか明確にすることで、学校やコミュニティ内に留まっていた活動が、外部から見えやすい活動に変わります。ACCUはGAP最終年に向けて、日本国内の持続可能な社会

\* GCED: Global Citizenship Education

\* ESD実践の方向性の検討や計画の策定に機関全体として取り組むこと



(上) ユネスコ・ダカール事務所にてオープニング(下) 学校視察、生徒の発案で実現されたグリーンウォールの前で



### ダカール研修

機関包括型アプローチの実践へ向けて、国際ファシリテーター研修をユネスコが主催しました。日本からは、2名の先生が参加しました。



## 気候変動プロジェクトが始動

教育協力部 若山洋子

2016年11月には西アフリカセネガルの首都、ダカールにおいてユネスコが主催する国際ファシリテーター研修に日本から2名の先生方が参加。世界12カ国から集まった教職員および各国ナショナル・コーディネーターと共に、機関包括型アプローチに関する学びを深めました。2日目には、現地の私立学校\*を訪問。土着の作物栽培に関する高度な研究からグリーンスクールの実現まで、多岐にわたるESD関連の活動を視察しました。

中でも、生徒の発案で実現したグリーンウォールは、食品容器やパイプなどの廃材を用いて作られており、乾いたダカールの土壌の上に鮮やかな色彩を放っていました。また、少し照れた様子で説明にあたる生徒と、熱心に話を傾ける国際色豊かな参加者の様子は、共通の課題とテーマのもとに12カ国がチームとなってプロジェクトを動かしているのだという、今後への期待を抱かせるものでした。

プロジェクトはまだ始動したばかりです。今後、参加校がそれぞれの特色を生かしたアクションプランを策定し、「機関包括型アプローチ」のキーワードの下、気候変動という地球規模の課題へ向けた学校・地域レベルの取り組みを実践し、参加者全体の変容を目指した学びを模索していきます。



参加した教員によるグループワーク

構築のための活動を世界に向けて視覚化し広げていく役割を引き続き担うことを考えています。また国境を越え、質の高い教育の共通価値を繋ぎ、よりダイナミックな活動を実施できればと思っています。ESDとユースに関してはGAP内の優先行動分野の1つとしてあげられている通り、ユースの活躍は重要達成項目の1つです。皆さんは「ユース」と聞いてどのような印象をもたれるでしょうか。「考えが柔軟」「チャレンジング」「未熟」など、ユースから受ける印象は様々なのがあると思います。会議で

も「持続可能な未来」をテーマにしているため、必然的に次世代を担うユースに注目が集まりました。GAP優先行動分野の達成度合とユースに関するESDの実践の把握ができていないなどの課題が示されました。その一方で、ユースがファシリテーターとなっていた分科会には多くの参加者が集まり、熱い議論が交わされました。そこで感じたことは、年齢で分けられる「ユース」以上に、ユース世代に共感される価値観をもつ共同体としてのユースの重要性です。年齢ではなく持続可能な未来の担い手であるという当事者意識そのものが重要であるということですね。今回初めて正式な参加者として国際会議に出席しましたが、ユースが主体となった議論の場においても、年齢の壁を越えた多世代間での議論が積極的に行われていたことが印象的でした。私自身も「ユース」そして持続可能な未来の担い手である当事者としてその意味を深く考える機会となりました。ユースの役割とは何でしょうか。柔軟な考えから生まれるこれまでにないプロジェクトの創造でしょうか。それとも、何事にも果敢に挑戦

し活動を展開することでしょうか。もちろん以上のような役割を担う「ユース」であると同時に、年齢に捉われた「ユース観」に留まらない広がりを持った活動をしていきたいと考えています。GAP内で語られる「ユース」は年齢によって分けられるものですが、これからのGAP後半戦は会議内でも実践されてきたように多世代間で未来について前のめりで語り合い、年齢の枠を超えたユースが実践を通して学んでいくことが重要であり、私自身は

いつでもその当事者の一員でありたいという思いを強くした会議でした。

**DATA**  
会議名：ユネスコとカナダユネスコ国内委員会の共同主催による国際会議  
The UNESCO Week for Peace and Sustainable Development: The Role of Education  
日程：3月6日(月)～10日(金)  
参加者：ESD関係者約200名

今回の会議には各国からASPnet\*の教員が参加し、日本からは大阪の箕面にある箕面こどもの森学園から高原麗奈さんが参加しました。ASPnetの先生同士の交流会も開かれ、環境は違えど同じことで悩んでいた、お互いの教育現場の状況に驚いたりしていました。交流会の時間が過ぎても話は尽きず、このような出会いを通して感動を子どもたちにも共有したいと、学校間交流に関してまで話が及びました。時差やネット環境など交流を阻害するものも多くありますが、

何とかが実現ができるようACCUとしても引き続きサポートを続けていくことができたいと思います。



左から3人目が高原さん

**DATA**  
プロジェクト名：UNESCO Whole Institution Approach to Climate Change  
テーマ：気候変動をテーマにした機関包括型アプローチの実践  
プロジェクト参加国および校数：ブラジル、デンマーク、ドミニカ共和国、フランス、ドイツ、ギリシャ、インドネシア、日本、レバノン、ナミビア、オマーン、セネガル(各10校)  
研修日程：2016年11月19日(土)～21日(月)  
研修参加者：プロジェクト参加10校から代表2校(各1名)、ナショナル・コーディネーター(1名)

\* Cours Sainte Marie de Hann

\* ASPnet schools：ユネスコスクール

ESD推進の手引研修

# 初の試みで得た手応えと課題

ACCUではESD実践への裾野を広げるため、昨年度から「ESD推進の手引」を活用した研修を始めました。この1年、研修会を通して多くの新しい出会いと発見がありました。

教育協力部 篠田真穂

## 初年度最後の研修会を福岡で開催

1月26日に、平成28年度最後となる「第5回ESD推進の手引を活用した研修会」を福岡で実施しました。講師として福岡教育大学の石丸哲史教授、宮城教育大学の市瀬智紀教授をお招きし、教育委員会、学校管理職、教職員44名が集いました。

前半は石丸教授より「次期学習指導要領を見据えたESDの展開」と題してお話いただき、世界と日本の持続不可能な状況から「なぜESDが必要なのか」を捉え、次期学習指導要領においてこのESDが重要なキーワードになってくることが指摘されました。後半は市瀬教授より「ESD推進

の手引」を活用した研修の進め方」と題して手引本体を使いながらESDをどのようにカリキュラムに盛り込んでいくのか、各地の実践事例を提示しながら分かりやすい解説がありました。

これまでESDに深く関わってきた方から今回の研修で初めてESDを知った方まで、様々な立場からESD推進への課題と展望が共有されたことで、新たな視点からESDを考える研修会となりました。

## ESDが広まるように工夫を重ね今年度も発進

平成28年度は全国5か所で研修会を実施してきました。どの地域でもできる限り講義（インプット）とワークショップ（アウトプット）の時間の

両方を持つことができるよう、講師の先生方や各地域の教育委員会の方々と相談しながら実施しました。事前（申込時）、研修直後、事後（3か月後）に調査を行い、「本研修は、今後自身が研修を行うときに活かすことができる研修だったか」という質問に対しては93%の参加者から「はい」の回答がありました。この研修会を通して新しい出会いもあり、様々な立場からの意見がいただくことができました。次期学習指導要領にESDを通して育まれる能力・資質の重要性が示されていることで関心も高まると期待されます。

今年度は全国4か所\*で実施予定です。さらにパワーアップした研修会を各地で実施することができるよう、昨年度の研修会の調査結果は分析後ACCUとユネスコスクー



ESDは教科ではないことはよくわかった。

ESDの考え方が分かったこともありますが、実際に取り組んだ方々の話を聞いたことが、とても貴重な経験になりました。

### 参加者の声

ESDに関して知らない参加者も多かったのですが、基礎的なことを出しあえたり質問したりすることができた。

ル公式ウェブサイトに公開予定です。ぜひご覧ください！

# 日タイ高校生 科学技術交流プログラム 最先端の科学技術に目を輝かせて

タイ教育省より推薦を受けた高校生14名、引率教職員1名の計15名を本邦に招けました。本プログラムは、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の支援を受けて、日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）の二環として実施したものです。

人物交流部 齋藤盛午

## 最先端技術に触れ 交流を深めるプログラム

タイから来日した高校生たちは、日本科学未来館、東京スカイツリー、筑波宇宙センター、サイエンス・スクエアつくばの訪問を通して、日本の優れた科学技術に触れました。特に、筑波宇宙センターでは、「これまでテレビのニュースや映画の中でしか見たことがなかった管制室

を実際に目の前で見ることで、まるで夢のようでした」との感想があがるなど、皆、目を輝かせていました。

市川学園市川中学校・高等学校訪問では、世界史の授業に参加し、同校の生徒とのグループワークやタイ文化についての発表を行いました。また、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の授業にも参加し、同校の生徒の研究を見学、討論、また体験することで科学技術を通じた交流が行われました。

2月12日の「日タイ高校生交流会」は、タイの高校生により多くの日本の高校生とつながりをつくってほしい、国際交流に興味がある日本の高校生に機会を提供したい、科学技術に興味があるという共通点を持つ両国の高校生の架け橋に

なりたいという思いでACCUが企画したものです。東京近郊の学校はもちろん、長野県からも参加がありました。午前の部では、自己紹介やお互いの学校生活について知る活動を行い、午後の部では、「身のまわりの「困った」をテクノロジで解決しよう」というテーマでディスカッションをしました。互いの知識とアイデアを出し合い問題解決を目指す過程で両国の生徒の絆が深まりました。

## 前途ある高校生たちの 人生の糧に

プログラムをきっかけに日本留学への興味・関心も高まったようです。「今回の訪日を通して、大学では日本に留学したいと考えてるよ

うになった」と語る参加者もいました。また、「ホームビジットを通して、日本に「第二の家族」ができた。いつか必ず日本の家族にまた会いに来る」との言葉も印象的でした。タイの高校生はもちろん、彼らと交流した日本の高校生にも変化があったようです。「内向きな自分を変えたい」との理由で日タイ高校生交流会に参加した生徒は、終了後、「自分が変わった気がする。これからは様々なことにチャレンジしていきたい」と笑顔で語りました。

本プログラムに参加したタイの高校生が日本での7日間の経験を今後の学習や研究に生かしてくれることを、そしていつか留学生として再び日本にやってくることを心から楽しみにしています。

一緒に考えたアイデアを笑顔で発表する日タイ両国の生徒（日タイ高校生交流）



### DATA

プログラム名：日タイ高校生 科学技術交流プログラム（JST支援）  
実施期間：2017年2月7日（火）～13日（月）  
訪問地：日本科学未来館、浅草、東京スカイツリー、筑波宇宙センター、サイエンス・スクエアつくば、ACCU、市川学園市川中学校・高等学校  
参加人数：15名

\* 長野（10月）、広島（11月）、大分（12月）、愛知（12月）予定

中国教職員招へいプログラム

# 国は違えど、同じ教員

人物交流部 有園佳子

第15回目となる「中国教職員招へいプログラム」は、2班に分けて実施されました。このプログラムでは学校をはじめとする教育機関を訪問し、日本の教職員や子どもたちと交流します。

プログラムの最終日にアンケートを実施していますが、アンケートには「学校訪問で最も有意義な活動は何か」を問う質問があります。その問いに対し、多くの参加者が「教職員との意見交換」と回答していました。理由を尋ねてみると、「日本の教員も自分たちと同じ課題や悩みを抱えていることが分かっ



熱心に訪問校の教職員の話聞く中国教職員(奈良市立富雄第三小中学校)

た。国は違うが、日本をはじめとする世界中に仲間がいることを実感できて嬉しい」と多くの参加者が声をそろえて話してくれました。教職員を対象とし、参加者が自身の自身の職業や教員人生について向き合う機会となっているこの事業は、参加者にとって貴重な経験となっているようです。参加者がより充実した経験をできるように、今後もお手伝いをしていきたいと思えます。

### DATA

プログラム名：国際連合大学2016-2017年国際教育交流事業 中国教職員招へいプログラム  
実施期間：  
第1班：2016年11月7日(月)～13日(日)  
第2班：2016年11月28日(月)～12月4日(日)  
訪問地：  
第1班：東京近郊、高知県  
第2班：東京近郊、奈良県奈良市、京都府  
参加人数：第1班20名・第2班20名、合計40名

## 高校模擬国連国際大会への第11回日本代表団派遣支援事業

# カーボヴェルデの大使として

模擬国連推進部 青木文

昨年11月の全日本高校模擬国連大会で優秀な成績を収めた6校11名の高校生たちが、ニューヨークで開催される国際大会に出場しました。今年の担当国は、カーボヴェルデ共和国。北アフリカの西沖合いに位置する、滋賀県ほどの大きさの島国です。

派遣生全員が今回初めてこの国の存在を知ったというほど耳慣れない国ですが、だからこそまずはカーボヴェルデの存在をみんなに知ってもらいたいという思いで議場に臨んでいました。派遣生達が付箋やホワイトボードを持参して視覚的にも工夫をしながら存在感を示そうとする姿がとても頼もしく感じられました。

ACCUは、今年から新しい取組として、書類選考なく誰でも参加できる入門型の高校模擬国連大会を8月に開催します。特に、模擬国連活動がどのようなものか見ることのない高校生にはぜひ参加し

て実際に体験していただきたいという思いで企画が始まりました。詳しくは、この大会の運営を担う実行委員の高校生たちが立ち上げたHPをご覧ください。



### 国際大会の成績

優秀賞	渋谷教育学園渋谷高等学校	第三委員会(社会、文化、人道委員会)
優秀賞	渋谷教育学園幕張高等学校	国際海事機関
優秀賞	灘高等学校	第一委員会(軍縮・安全保障)

### DATA

派遣期間：5月9日(火)～15日(月) \*大会は5月12日(金)～13日(土)  
開催場所：米国ニューヨーク国連本会議場およびグランドハイアットNY  
参加者：世界30都市から約1600名 / 日本代表団は昨年全日本大会で選抜された6校11名(浅野高等学校、開成高等学校、渋谷教育学園渋谷高等学校、渋谷教育学園幕張高等学校、桐蔭学園中等教育学校、灘高等学校)

韓国教職員招へいプログラム

# 交流の持続・発展に期待

人物交流部 高松彩乃

韓国教職員招へいプログラムは今回で第17回を迎え、プログラムの累計参加者数はもうすぐ2000名に到達します。

プログラム参加後の交流活動は、国を問わず参加教職員の大きな関心事ですが、交流の持続・発展において頼りになるのは、数多くいる「先輩」です。今回のプログラムでは、交流会への参加やホームビジットへの協力など、過去にプログラムに参加された方々とのつながりを感じる場面が多く見られました。また、訪問団によるグループごとの成果報告会では、プログラムをきつ



地域の方と児童によるお囃子で訪問団を大歓迎(町田市立小山田小学校)

### DATA

プログラム名：  
国際連合大学2016-2017年国際教育交流事業 韓国教職員招へいプログラム  
実施期間：  
2017年1月17日(火)～23日(月)  
訪問地：東京近郊、各地方自治体(Aグループ：東京都 柏江市、Bグループ：千葉県八千代市、Cグループ：千葉県)  
参加人数：118名

けに姉妹校締結に至ったケースなど過去の参加者による日韓交流事例の共有を行ったほか、「グループ内のユネスコスクールを持ち回りで訪問し、交流を深める」という参加者による韓国国内でのネットワーク強化宣言もありました。今回初めてプログラムにご協力いただいた日本の関係者の方々にも、ぜひ次は韓国を訪問していただき、新しい交流を作り出し、続けていく仲間としての活躍を期待していきます。

## ACCU奈良・文化遺産ワークショップ in フィリピン

# 歴史的聖地で実習

奈良事務所 研修事業部長 中井公

「木造建造物の記録方法」が、今回の研修テーマです。2016年10月フィリピン国内各地から、歴史建造物の調査や保護に携わる若者15名が参集しました。首都マニラの国家歴史委員会で開講式と座学を済ませ、南郊のカピテ州カウィットに会場を移して、実技実習です。

実習の教材に使用した建物は、今は記念館になっている、独立革命の指導者エミリオ・アギナルド(1869～1964)の生家です。1898年に彼はここで、スペインからの独立を宣言しました。今は、政府が「歴史的聖地」に指定して、手厚く保護しています。

そうした由緒ある建物で、まずは、建物の平面図と断面図の作製です。実物を観察しながら、建具類や部材の組合せ方など、各種の情報を図上に表現していきます。はじめは日本流の細かさに当惑気味で、屋根裏構造の表現などは手こずりました。けれど慣れるにつれ

て上手くまとめ、成果品の仕上げりは上々でした。あわせて、部材に残る工具の痕跡を記録する摺本(すりほん・拓本の種)の技術なども学びました。続いて、写真記録の実習です。ここフィリピンでも、「柱を平行にまっすぐ撮るには?」「薄暗い室内をきれいに撮るには?」と聞かれましたが、講師直伝のカメラ操作と照明の工夫で、良好な画像が得られることが実感できたようです。

### DATA

プログラム名：  
文化遺産ワークショップ  
実施期間：2016年10月10日(月)～15日(土)  
実施場所：フィリピン(マニラ、カピテ州カウィット)  
参加者：15名



AGGU活動メモ 2016年12月~2017年4月 ①実施期間 ②主催、共催団体名 ③開催場所 ④参加国、参加者数

**ユネスコスクール支援大学間ネットワーク (ASPUUnivNet) 第2回連絡会議**  
ユネスコスクール全国大会にあわせてユネスコスクール加盟校ならびに検討校を支援する大学のネットワーク (ASPUUnivNet) の今後について話し合いを行う。  
①12月4日(日) ②文部科学省、ACCU ③金沢市 ④約30名

**韓国教職員招へいプログラム**  
詳細…P8  
①1月17日(火)~23日(月) ②国際連合大学、ACCU ③千葉県成田市、東京都、東京都狛江市、千葉県八千代市、千葉県 ④118名

**「ESD推進の手引」研修 in 福岡県**  
詳細…P6  
①1月26日(木) ②文部科学省、ACCU ③福岡市 ④44名

**ESD重点校形成事業 ワークショップ ~輝け!サステナブルスクール~**  
サステナブルスクール活動事例の共有と今後の方向性をデザインするワークショップを実施。気候変動に関する講演 (P5) や活動計画の立案を行った。  
①1月28日(土) ②文部科学省、ACCU ③日本出版会館 ④約50名

**JICAパキスタン訪日研修**  
JICAのプログラムでパキスタンの研修生を

受入。  
①2月2日(木) ②JICA、ACCU ③日本出版会館 ④約20名

**日タイ高校生科学技術交流プログラム (JST 支援)**  
詳細…P7  
①2月7日(火)~13日(月) ②ACCU (JST 支援) ③東京都、千葉県、茨城県等 ④15名

**ユネスコ国際会議 (GAPレビューフォーラム)**  
詳細…P2  
①3月6日(月)~10日(金) ②ユネスコ ③オタワ(カナダ) ④約200名

**奈良 文化遺産保護に資する研修 (個別テーマ研修)**  
「博物館等における文化財の調査・記録・保存修復・活用」をテーマにした研修を実施。  
①11月8日(火)~12月6日(火) ②共催：文化庁、ACCU奈良事務所、東京国立博物館、奈良文化財研究所 ③ACCU奈良事務所他 ④カンボジア2名、ラオス2名、ミャンマー2名

**奈良 文化遺産の保護に関する国際会議**  
「アジア太平洋地域における文化遺産保護人材養成の実状と課題」を開催。  
①12月13日(火)~15日(木) ②文化庁、東京文化財研究所、奈良文化財研究所、ACCU奈良事務所 ③ホテルフジタ奈良 ④10か国計16名

**制作物のご紹介** 送料のみのご負担でお送りします。内容はユネスコスクール HP からダウンロードいただくこともできます。



「キラリ発進!サステナブルスクール〜ホールスクールアプローチで描く未来の学校〜」ESD重点校の活動紹介  
「ひと目でわかるESD推進事業ガイド」ACCUが実施するESD推進事業紹介 (日英両記)  
「ユネスコスクール支援大学間ネットワーク"ASPUUnivNet"」ユネスコスクール支援大学の紹介

### SMILE Asia プロジェクト 実施団体の職員が来日しました

ACCUがカンボジアで展開している識字教育SMILE Asia プロジェクト。継続してご支援くださっている凸版印刷株式会社様が、現地の実施団体であるCWDAの職員2名を招いて、第10回トパンチャリティーコンサート (3月1日、2日開催) で来場された皆様に感謝を伝える機会をつくっていただきました。温かい拍手はTSUKEMENの魅力あふれる演奏とともに心に残るものでした。

CWDAの職員は、ACCUスタッフとのプロジェクトの進め方についての具体的な打合せのほか、凸版印刷株式会社の工場の見学や公立小学校の見学や給食体験など盛りだくさんの予定をこなして帰国しました。新年度のプロジェクトの進捗については、今後お知らせしていきます。



演奏後のTSUKEMENメンバーとCWDA、ACCU職員 (トパンホール)

### Pick up Information

### シンポジウムを開催しました グローバルエデュケーション モニタリングレポートシンポジウム2016

ACCUは、SDGs\*4「すべての人に質の高い教育を」達成に向けてユネスコが作成したGlobal Education Monitoring Report(GEMR)2016概要の日本語版「人間と地球のための教育」の内容を共有するシンポジウムを、3月22日に国際協力機構 (JICA)、教育協力NGOネットワーク (JNNE) と共催で開催しました。

ACCUからは教育協力部の篠田がパネリストとして参加し、各自が変容の担い手であることを意識し皆が学びあうことで持続可能な社会をめざすことの大切さを発表しました。シンポジウム内容とレポートはJICAのホームページでご覧いただけます。

[https://www.jica.go.jp/topics/2016/20170322\\_01.html](https://www.jica.go.jp/topics/2016/20170322_01.html)



「グローバルエデュケーションモニタリングレポート2016概要」Global Education Monitoring Report (GEMR)

## ACCU職員が出前授業を行いました。



**1月26日** 長野県中野西高等学校のUNESCO-Week Seminarにおいて、2・3年生対象の出前授業を実施しました。ユネスコなどの国連機関での仕事について、自身の勤務経験で得た情報やクイズを交えながらの話し、熱心に耳を傾けてくれました。講義後のアンケートからは、「世界と日本のつながりを実感できる仕事」「多文化にも対応できる柔軟性が大切」といった、本講義を通じて伝えたかった多文化共生へのヒントのようなものを感じ取ってくれていることが伝わり、大変嬉しく感じました。日本のユネスコスクールから世界へ羽ばたき活躍される日が楽しみです。

(教育協力部 若山 洋子@長野県中野西高等学校)

**3月1日** 韓国への派遣プログラムに参加された先生との出会いがきっかけで、母校でもある東京都立国際高等学校で出前授業をしてきました。「地域研究」という授業を選択している高校2年生27名を対象に、ACCUやユネスコのことに加え、卒業生として高校時代の進路選択のお話をさせていただきました。「身近な外国であるアジア諸国との交流・協力の大切さを実感した」「いま学校生活で経験していることが将来の自分に影響を及ぼすと感じ、一日一日を大切にしたいと思った」という感想がとて嬉しく、頼もしく感じました。

(人物交流部 高松 彩乃@東京都立国際高等学校)  
お問い合わせ：総務部

### アジア 東奔西走 第12回

## タイへ一人旅、家族ぐるみの歓迎

ユネスコ・アジア文化センター 人物交流部 齋藤 盛午

イサーン (タイ東北部) の玄関口、ナコーンラーチャシーマー県にあるピマーイ遺跡。タイのアンコール・ワットとも言われるこの場所で、昨年の「タイ教職員招へいプログラム」の参加者であるボン先生、トゥート先生と待ち合わせをしていました。家族全員でやってきたボン先生、妹と一緒に現われたトゥート先生。もともと3人で会う約束がいつの間にか大所帯に。そのことに特に驚かなかったのは、その直前に訪問した首都バンコクでも同様の経験を幾度としていたからです。逆に、タイの方々は一りで旅行をしている私に少し驚いているようでした。

ピマーイ出身だというボン先生の旦那さんがガイドを買って出てくれたおかげで、遺跡の構造や、当時の人々の暮らしについて知識を深めることができました。ソムタム (パパイヤサラダ) やサイクローク (ソーセージ) など辛いことで有名なイサーン料理を堪能したあとに訪れたサイ・ンガム公園では、森だ



ピマーイ遺跡にて (左から、筆者、ボン先生、トゥート先生)

と思っていたものが実は大きな1本の菩提樹ということに驚かされました。仏教国としてのイメージが強いタイですが、精霊信仰も強く根付いており、大木の精霊に合掌をして、公園をあとにしました。

今回の訪泰では、海外からの来客を家族総出で迎えるタイ式の歓迎に心があたたまると共に、家族のあり方についてあらためて考えるきっかけとなりました。バンコクを筆頭として急速な発展を経ているタイですが、この「タイらしさ」はいつまでも残っていてほしいと強く感じました。

\*SDGs: Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標  
※コラム「法人維持会員訪問記」はお休みします。